

モーリヤック論(続き)

——その主要作中人物について——

高橋和子

——作者はどこにいるか

——作者と作中人物と読者

△弁護士がドアをあけた。テレーズ・デケールウは、裁判所の裏口に通じているこの廊下の中で、顔の上に霧を感じ、ふかぶかと胸の奥に吸いこんだ。彼女は誰かが待っているのではないかと心配で、外に出るのを躊躇した。▽何度も引用するようにこれはテレーズの登場の個所である。ところで、作者自身は一体どこにいるのであるうか。彼は何処にもいない、たゞテレーズが一人いるだけである。しかし本当を言えば、作者モーリヤックはテレーズの中にいるのである、彼女の意識の中核に身を据えているのである。テレーズが、△顔の上に霧を感じ、ふかぶかと胸の奥に吸いこむ▽時、彼もまた顔の上に霧を感じ、ふかぶかと胸の奥に吸いこむ▽に従ってテレ

ーズなる第三人称は作者というもう一人の人物と二重になっているのである。

△乱暴に、もつとも、それでもまだ夫は目を覚まなかったが、再びテレーズは夫の身体を手で押しつけて……、あゝノ思いきって、永久に押しつけてしまえたらノ寝台の外へ、闇の世界へ、突き落せたら！▽あゝノと溜息をついているのはテレーズである。が同時に作者もまた彼女の内部で、あゝノと溜息をつく、我々はテレーズを通してモーリヤックの溜息を感じとる。作者は女主人公の内部にいて彼女が考えたり感じたりする通りに彼もまた考えたり、感じたりする。モーリヤックは作者自身である△私▽を第三人物△彼女▽に重ね合わせるのである。△彼女は誰かが待っているのではないかと心配で、外に出るのを躊躇した▽と書きながら、作者は、△私は誰かが待っているのではないかと心配で、外に出るのを躊躇した▽という気持で書いているのだ。これはサルトルの言う△第三人称のもつ小説的な曖昧さ▽を利用して、△私▽が△彼女▽の内部に入り込んだのである。従って△私はテレーズである……テレーズの考

えは私の考えであり、私の考えは彼女が彼女の考えを懐くに從つて私の懐く私の考え³ Vとなる。こゝに彼女(作中人物)私(作者)という心理的關係が成立つ。作者はテレーズと一体になり、どこまでが作者でどこからが女主人公なのか識別できなくなる。テレーズに限らない、他のすべての主要作中人物についても同様である。作中人物の内部に身を置くこと、△その被造物と合体し、被造物の中へ自己を解消すること、被造物と自己を同一化し、被造物自身になりきるまでに共犯關係を押しすゝめること⁴ V、これがモーリヤックの作中人物に対する態度であり、また彼の人物創造の祕訣である。

モーリヤックがジュリアン・グリーンとその女主人公アドリエンヌ・ムジュラとの關係について書いてある次のことは、またモーリヤック自身の創作態度の説明に思える。△彼女はジュリアン・グリーン氏ではない。しかしジュリアン・グリーン氏はアドリエンヌ・ムジュラになろうと努める。彼は彼女が触れるものに触れ、彼女が感じるものを感じる。彼はその被造物と合体する。⁵ Vモーリヤックがこのように作中人物を内側から捉え理解することは、決して異常なことではない。実際、一般的に言つて、一つの対象をよく理解するには、たった一つの方法しかないのである。それはまさに合体の方法である。この意味においてモーリヤックと対蹠点にあるフロロベールの事を考えてみよう。フロロベールは言うまでもなく常にその作中人物の外部、またその作品の外部に身を置いている。彼は自分の身を何物かに委ねることもしなければ、作品のために身を犠牲にすることもない。この点に関してモーリヤックは批判的である。△「ボヴァリー夫人」は傑作である、即ち、一つの完成品として、創造した考から離れてしまった一世界として提出されている……作

品である。⁶ V△ボヴァリー夫人は私自身であるVというフロロベールの有名な言葉にも拘らず、敢えて言うならば、ボヴァリー夫人はフロロベール自身ではないのである。そしてモーリヤックにこそ次のように言う権利があるのである。そしてモーリヤックにこそウは私自身である、と。更にまた、ガブリエル・グラデル、レイモン・クーレーージュ、ユリア・クロス……その他の主要作中人物は皆私自身である、と。フロロベールがその有名な言葉を口にした時は嘘をついたのではなかった。しかし△ボヴァリー夫人は私自身であるVという表現と、△テレーズは私自身であるVという表現とは何という大きな相違があることか。フロロベールはボヴァリー夫人の生き方の中に彼自身の生き方の一部を導入したまでである。彼はあくまで女主人公の外部にいて、外部から描写するばかりである。彼は女主人公に彼の熱い息吹を伝えることもなければ、その苦しむ魂で彼女に生命を吹きこむこともしないのである。

作中人物に対すこうした冷静な態度はフロロベールだけにかぎらない。十九世紀のレアリスト達の多少とも共通な態度であった。彼等は作中人物の行為や心理を外部から観察し詳細に描写する。しかいくら綿密に説明し描写しても、その多くの言葉や文句の中に作中人物は生き埋めにされて、生き／＼と実際に生けるが如くに浮びあがってくることはない。一つの対象物の囲りを何度堂々めぐりしても決してその本質に触れることはできないからである。なる程モーリヤックの小説は、彼自身が傑作についてした定義によれば、傑作ではない。しかしそれこそまさに彼が望むところである。彼にとつて、△悲惨なる作者の苦しめる魂が割れ目から漏れるV不完全な作品の方が、△魂なき作家あるいはその作品に全的に……自らを

投げ与えることを拒絶する作家が、外部から、極めて巧妙に構築した作品。Vよりは遙かにまさるのである。実際のところ、例えばテレビズを通して漏れいで、彼女に生きた力を与えているのは、他ならぬモーリヤック自身の苦しめる魂なのである。

ところで、何故、作者とその作中人物との間にこのような共犯関係が成立するのであろうか。これは単なる小説技術にすぎないのだろうか。これに答えるために次の疑問を考えて見よう。作中人物は一体どこから創りだされるのか、という初歩的な疑問である。モーリヤックはその作中人物を何処へ見つけに行くのだろうか。彼自身が「小説家とその作中人物」の中でこれに答えている。Aある読者が眉を皺めて彼等（ある種の小説家達）に尋ねる。Kあなた方はこんな恐ろしいものをみんな何処へ見つけに行くのですかK、と。不幸な作家達はこう答えざるをえないのだ。K私の中へK。V実際、モーリヤックがその作中人物を引きだしてくるのは、彼自身の内部からなのである。「蝮の絡みあい」の主人公が、家族の傍でモーリヤックの感じた一時的な孤独感と焦立ちから引きだされたことを我々は既に知っている。なる程、一時的な気分から引きだされたのはちがいない。しかしこの一時的な気分は忽ち重要な意味を帯びてくるのである。偶然に、ほんの一時的に心の表面に現われたものであるが、実はそれは未知のまゝ心の奥深く潜んでいたものである。ところで、我々の存在の奥底には一体何が隠されているのだろうか。Aあの海底の地帯へ敢えて降りていこう。そこには敗北した情熱や形をなさぬ怪物達、消え去りたい思い出の数々が蹲っている。Vその魂の深所でこそ、人知れぬ劇が演じられているのだ。Aそこでは多分、神のみが鎮めうる嵐が荒れ狂っている。しかも

それは心の表面を動かすことさええないのである。10 V殆んどの人々は自分達の内部のこの暗黒に気づかぬふりをしている。しかし自己を意識せずにはいられぬモーリヤックは自分自身の存在の基底へたえず降りていく。そしてその暗黒を揺さぶり動かし、蹲っている怪物達を一つ一つとりあげ、抑圧されているすべてのものに生きる機会を与えるのである。小説の中で生きる機会を。モーリヤックは言っている。A我々の作中人物達は、我々が犯さなかつてすべての罪を負わされたブック・エミッセル（人の罪をなすりつけられた男）であることを……私は肯定した。11 Vここに至って、彼が作中人物の背後にいていつも息を切らし喘いでいたわけが解るのである。それら主要作中人物達は、彼が生きるでもあろう、また生きたでもあろう人生、彼が敢えて生きようとしないうち、また生きようとしなかつた悲惨で恐ろしい人生のいくつかを彼の代りに生きているからである。作者の内部にありながら彼が祕かに作中人物に委ねたこの罪を絆として、作者とその作中人物とはかく結ばれる。こうして両者の共犯関係が形成されるのである、しかしこれだけでは作中人物が生き／＼と生きるのに十分ではない。次に問題になるのは、読者と作中人物との関係である。モーリヤックがその作中人物を彼自身の内部の暗黒から引きだしてきたことを我々は先に認めた。しかしこの存在の底辺にある暗黒は必ずしも彼固有の領域ではないのである。彼は極めて深くその魂の底へ降りたので、あらゆる人々に共通な暗い海底に到達してしまつたのだ。従つて、作中人物は作者のブック・エミッセルであると同時に、読者にとつてもブック・エミッセルとなり、読者が自らの内部に押しこめて祕しもつているものをモーリヤックは読者自身の眼の前に暴き出して見せるのである

る。自らの悲惨や暗黒に気づかぬふりをして、読者の虚をつくのである。モーリヤックはボードレルと共に、しかしあの冷笑はなく、こう言っているかのようだ。△偽善の読者よ。——我が同胞よ

——我が兄弟よ。12 Vと。読者は自らの怪物的な部分がかくも公然と暴露されるのを見て、不意をつかれる。△テレーズ・デケールウは夫の毒殺を欲したのであるうか。この疑問のために、彼女の苦しげな姿が我々の心の中から離れない。テレーズのことから、いくらかの女の読者達は自らの心を顧て、自分だけの秘密の弁明を——自分、共犯関係を、テレーズに求めることができた。13 Vこゝにおいて、読者と作中人物とはその共通の罪によって結ばれるのである。その罪が他人の眼から隠蔽されねばならないものであるだけに、両者の共犯関係はますます緊密になる。こうして、作者が解き放った作中人物は読者の魂の中で更に豊かになる。△これら作中人物達は彼等自身の命によつて支えられているのではない。これらの幻影の中に入り込み、それらを膨らませるのは、我々の読者であり、その生きた心の不安である。14 Vとモーリヤック自身が言っている。サルトルもまた小説のこの秘密を指適している。△ラスコリニコフの期待は、私が彼に貸しあたえる私の期待である。15 V更にまた△一卷の小説は乾いた紙の僅かな堆積にすぎないか、さもなければ運動している一つの大きな形体——読書である。この運動を小説家とはらえ、導き、曲げ、それを作中人物の糧とする。16 Vさて、こゝで明らかのように、彼女△私という先述の關係に於いて、この△私△は作者の△私△のみならず、読者の△私△でもあるのだ。そこで作者と読者と作中人物とはお互が共犯者であることを感じ合う。彼等は内的な罪のまわりに固く結ばれる。作中人物が溜

息をつく時、作者もまた溜息をつき、読者も一緒に溜息をつくのである。この共犯關係の雰囲気の中で作中人物の姿はより生き／＼と膨らんでくるのである。

附加すべきことは、モーリヤックの作品の中で頻々と出くわす△我々△への突然の移行△ともいうべき用法である。

△彼女は背後に老人の息を切らす音を聞いた。あゝ／＼こうした人間のうるささは、我々の心は彼等に関心を持たぬのに、彼等は我々を選び、そして我々は彼等を選ばない。17 V

△突然、テレーズは自分のしなげばならぬことをさとした。……我々の一番よく知っているはずの人間が、目前にいなくなるが早い、なんとすみやかに我々は彼等を変形させてしまうことか△18 V

こうした△我々△の用法をその他モーリヤックの多くの頁の中に見つけることができる。この△我々△とは一体何をさすのだろうか。それは作者と作中人物と読者のことに他ならない。そしてこの用法が三者の共犯關係を心理的に強調することに貢献していることを指摘しておく。

註1 Thérèse Desqueyroux, p. 78

2 Sartre, Situations I, (Gallimard.) M. François Mauriac et la Liberté, p. 42

3 Ibid. p. 43

4 Dieu et Mammon, p. 160

- 5 Le Roman, p. 116, (L'Artisan du Livre)
- 9 Le Romancier et ses Personnages, p. 143
- 7 Ibid.
- 8 Ibid. p. 129.
- 6 Oeuvres Complètes de Mauriac, xi, Journal I, p. 8
- 10 Ibid.
- 11 Le Romancier et ses Personnages, p. 113
- 12 Les Fleurs du Mal, Au Lecteur
- 13 Le Romancier et ses Personnages p. 124
- 14 Ibid.
- 15 Sartre; Situations I, Qu'est-ce que la Littérature?
p. 95
- 16 Ibid. Situations I, M. Francois Mauriac et la Liberté.
p. 36
- 17 Le Désert de l'Amour, p. 81
- 13 Thérèse Desqueyroux, p. 160

N

——人間とは何か

モーリヤックは日記の中で次のように書いている。△私が仕事につくや否や、すべては私の永遠の色調に染まる。私の最も美しい作中人物達は何か硫黄質の光の中に入ってくる。1) 硫黄質の光を帯びた作中人物とは一体どういうことであろうか。次にもう一つ、「

海への道」のプロローグを引用しよう。△殆んどの人々の人生は死んだ道であり、何物にも到達することはない。しかしその他の人々は、自分が未知の海に向つて進んでいることを幼少の頃から知っている。既に風の苦味が驚き、既に塩の味が唇にする。やがては、最後の砂丘を乗り越えようと、あの無限のパッションが砂と怒濤の泡で頬に襲いかかる。その中へ落ちこむか、後へ引き帰すかしかもう道は残されていないのだ。2) 先の引用で述べられた、硫黄質の光を帯びた△私の最も美しい作中人物達△とは、ここでモーリヤックがかくも巧みに表現した後者の人々に他ならないのである。彼は人間達をここで二つの群に分けている。一方は、凡庸な道を行く殆んどの人間達であり、他方は、情念の海へ向つて駆けていく極めて少数の人々である。言いかえれば、生ぬるさという形罰をになう人々と烈しさの刑に処せられた人々である。モーリヤックにおいては、前者は副次的作中人物として現われ、後者は主要作中人物として登場する。

さて、前者の人々は、愚かさや卑小という否定しがたい汚点を身につけている。彼等は自分自身を意識することが少ないが故に、その愚かさの喜劇を永遠に繰り返す。この種の人々を凝視するモーリヤックの眼は、ある種の憐愍であつて、ボイドレルやフローベールのような冷笑ではない。しかしながら彼の憐愍の感情はかなり複雑である。私には、憐愍と憎しみ(または軽蔑)との間の振幅を行き戻りするモーリヤックの苦しい努力が見えるように思われる。いや、これは言い過ぎかも知れない。モーリヤックは憎しみを克服してキリスト教的憐愍に到達したのである。二つの人間の群のうち他方の群をつくる少数の人々は、あまりにも危険な心の傾向を生れ

ながらに持っている。これらの人々は、いざ不幸を創造する能力ともいうべきものによって、不可避的に自らの周りに自らの不幸を創っていく。

こうして、モーリヤックが抱懐する人間世界のイメージは汚濁と不幸に満ちているのである。一見したところ、人間世界は必ずしもそのように見えなくても知れない。しかし我々はモーリヤックが決して世界の表面にとどまってはいいないことをよく知っている。彼はいよいよ深く低く、人間世界の奥底へ降りていくのである。彼が描くのは外的な罪の世界ではない。モーリヤックは人間存在の奥底にある汚れ、罪と敢えて言えないような——しかしやはりそれは罪にちがいない——汚濁や暗黒を描くのである。テレーズの罪はその殺人行為にあるのではなく、むしろその濁った魂の中にある。同様に「蝮の絡みあい」の主人公はその吝嗇行為のためでなく、その意識の龐大な汚れの故に罪人なのである。かくの如くに外部から見えない所に、人間の本質なるものは秘められて存在しているのである。

モーリヤックによれば、この汚濁して不幸なる人間の本質に疑いもなく原罪の結果である。人間は悲惨のたゞ中に、救いもなくうち棄てられている。こうした人間の状態を彼はパスカルと共に、**入神なき人間の悲惨**、**Vと呼ぶ**。そして彼が不幸の人間世界を描くのは、いつもこの観点からである。入神は具体の中で仕事をするメタフィジシャンだ。……私は悪のカトリックの世界を感じ手に触れ臭いに嗅いでみられるようにしようと努める。⁴ Vとモーリヤック自身言っている。

それでは、この作家の理解するような人間は、果して救われるこ

とがないのであろうか。彼が救いの期待をかけているのは、まさに、危険な心の傾斜をもったあの烈しい人々、彼の小説に現われるあの硫黄質の光を帯びた苦しい人々なのである。

入「蝮の絡みあい」の主人公或いはテレーズ・デケールウは、いかに嫌悪すべきものに見えようとも、私が最も憎むたゞ一つのもの、人間の中にある堪えがたいもの即ちいゝ気な自己満足を持っていない。彼等は自分自身に満足せず、自らの悲惨を知っているのだ。⁵ Vこれは「小説家とその作中人物」の中の一節である。なる程、モーリヤックの主要作中人物は下の方へ墮ちていく危険な傾向を身につけてはいる。彼等は泥沼の中、悲惨の中「無限に墜落していくかのようなのである。「蝮の絡みあい」の主人公はその憎悪のために、テレーズ・デケールウはその何かしら暗い魂の傾斜のために、またガブリエル・グラデルは悪への志向のために、テレーズは悲惨な愛のために、息子クーレージュはその失望せる愛のために。彼等は、破滅だけが待っている入未知の海へ向ってV喘ぎながら駆けて行く。しかしながら、彼等は決してこの破滅の海の中へ投身してしまふことはないのである。彼等はどんな時にも入自らの悲惨を知っているVからである。彼等は自分自身の現状に決して満足していないからである。彼等はいわば、明徹なる絶望者である。入人間は自分が悲惨であることを知っている。故に人間は悲惨である。何故なら現に悲惨なるのだから。⁶ Vとパスカルも言っているではないか。そしてこれら絶望者が神に触れるのは、まさにこの悲惨の意識のたゞ中においてなのである。しかしその恩寵の瞬間も忽ち次の一瞬の後には消え去ってしまうようである。彼等は直ぐに、この光ある一点から離れて再び落ちて行く。こうして彼等は二つの

極の間をいきつ戻りつするのである。人間は \wedge 虚無と万有の間の中間者 \vee であるがパスカルが定義したように。かくの如くに、モーリヤックの主要作中人物はその生涯の大半を、虚無と万有の間にあつたえず不安で不安定なものに終始する。彼等はその自己認識の明徹さ故に破滅の海に身を沈めることもできず、また、その下方へ向う危険な傾向故に神に全的に身を委ねることもなしえない。生涯の終りになつてのことではあるが少くとも神に身を委ねることになるのは、「蝮の絡みあい」の主人公や「悪い天使達」のガブリエル・グラデルなどだけで、他の絶望者は絶望のまゝ果てるのである。

モーリヤックがこれら絶望者にだけ救いの期待をかけていること、そして彼等が丁度、最も苦しい瞬間に神に触れるのだということ、私は先に述べた。それは何故であろうか。テレーズは自殺しようという瞬間に、心の中で叫ぶ。 \wedge もしあの存在が存在するものならば……それは存在するのだから、既に手おくれになる前に罪の手を思い止まらせてくれんことを。 \vee また「蝮の絡みあい」の主人公は呻吟する。 \wedge 私は六十年をかけて、この憎悪に悶える老人を造りあげた。私は現在の私以外のものではありえない。別な私にならなければならぬのだが。お、神よ……神いままは。 \vee \wedge もしあの存在が存在するものならば \vee といふ、 \wedge 神いままは \vee といふ、いづれも仮定的な表現ではあるが、それは既に神の存在を信じている者の苦しい叫びである。彼等を神に引き渡すのはまことに彼等の苦悩なのである。逆に言えば、神は、そのようにして現われるのである。何故なら、神が必要とする人間は、義しき人々ではなくて、下方へ墮ちる能力をもった人々、絶望する能力をもった人々だからで

ある。 \wedge 悪に身を委ねたように見える人々が、恐らく他のあらゆる人々よりも先に、選ばれた者となるであろう。そして彼等の失墜の深さが、裏切られた天職の大きさを示すのである。……恐らく聖者となりえたかも知れない人々のみが失墜するのである。10 \vee と、「悪い天使達」の中で若い司祭アラン・フォルカスは考える。失墜する能力が大きければ大きい程それだけ、高みへ昇らんとする能力は大きいからである。こういうわけで、モーリヤックがその主要作中人物に選ぶのは常にこの種の人々である。彼等は下方へ向う危険な傾斜を身につけているばかりではない。彼等はあの高みを憧憬する能力を秘めているのである。彼等の苦悩はまことにその点にある。二つの能力の間に（敢えて言うならば神と悪魔の間に）宙ぶらりになった彼等は、常に、そして何処にいても自分自身に不満である。彼等はいつも不安なのである。これが彼等の内面のドラマ——奥深く秘められて外部からは見ることもできない——あの \wedge 虚無と万有の中間者 \vee のドラマである。そうした人々の苦しみが自らのまはりに撒きちらす混濁した光、それこそあの \wedge 硫黄質の光 \vee ではなからうか。

- 註1 *Oeuvres complètes de Mauriac, XI, Journal I, p. 155*
2 *Les Chemins de la Mer, p. 7 (Grasset)*
3 *Pascal: Pensées, p. 85 (Garnier Frères)*
4 *Oeuvres complètes de Mauriac, XI, Journal I, p. 154*
5 *Le Romancier et ses Personnages, p. 139*
6 *Pascal: Pensées, p. 174*
7 *Ibid. P. 88*

8 Thérèse Desqueyroux, p. 181

9 Le Noeud de Vipères, p. 293

10 Oeuvres Complètes de Mauriac, II, Les Anges noirs, p. 274

むすび

この本論において、私はモーリヤックの主要作中人物と彼等の生き／＼とした生命力をいくつかの観点から研究してきた。しかし研究の終りに達した今、彼等作中人物が私のペン先から忽ち逃れていくように思われる。彼等は私の研究から遙か遠い所に帰って行く。確かに、研究からは遠い所に。しかし何と彼等は私の心の真近かにいることだろう。彼等は研究という手段で捕らえられるには、あまりにも生き／＼としているからである。そして私は今更ながら、このような作中人物を創造しえたモーリヤックの偉大さに驚かざるをえないのである。そしてあまりにも当然な、言う必要もないように思われることであるが、私は深い意味をこめて次の事を言いたいのである。モーリヤックがどのような作中人物を創造しえたのは、何よりも先づ、彼が人間の心の苦しい認識に到達していたからである。彼の文学のすべてはそこから出発するのである。偉大な小説は決して技術だけからは生れない。私が技術を軽視するというのではない。私はこの研究でモーリヤックの優れた小説技術を見つけたばかりの所である。しかし彼の小説技術は、これもまた先で見たとように、その人間認識といつも結びついているのである。人間認識が先づ優先するのである。何故モーリヤックはこれ程人間の心を知っているのだろうか。彼は何よりも先づ自分自身の心をよく知って

いるのである。その地点から彼は深く地中に穴を掘ることは、本論で述べた。彼はそうして、あらゆる人間に共通な地下の暗い地質を覗き込む。嫌悪や恐怖に叫びをあげることなく、それを凝視する。

誠実で、自己への意識を忘れることのないモーリヤックはその地中の暗然とした土壌の中にいつも自分自身を再発見する。彼はその汚濁して暗いものを小説の中で展開する。全的に自分の身を委ね、身を犠牲にさらす。だから、我々が彼の作中人物を通していつもいたる処で出会うのは、モーリヤック自身である。我々の心を苦しく感動させるのは、モーリヤック自身の苦しめる魂なのである。一般に、一つの小説が読者の心を動かすのは、作者の魂が小説の隙き間から漏れでる度合いにかゝっているのである。小説創造の秘密はまさしくこの灯にあるのである。モーリヤック自身の次の言葉を引用しながら私はこの論文を終わりたいと思う。△書くこと、それは身をまかすことである。Ecrire, C'est se livrer. 1▽

註1 Dieu et Mammou, p. 71